

Title	医学部・歯学部「情報活用基礎」を担当して
Author(s)	野崎, 剛徳
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2011, 12, p. 40-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70318
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

医学部・歯学部「情報活用基礎」を担当して

野崎 剛徳（大阪大学 大学院歯学研究科 口腔分子免疫制御学講座 口腔治療学教室）

はじめに

私が医学部・歯学部の情報活用基礎を担当するようになって10年になる。この間に情報の収集、整理と分析、そして公開に関わる環境は大きく進化し、多くの人々の生活スタイルに明らかな変化をもたらされている。私はこの授業を担当するとともに、歯学部附属病院での診療業務に従事しているが、いずれにおいても、情報環境の変化を痛感する機会が増えている。そこで情報活用基礎の担当教員として、また臨床の場に携わる者として、これまでに経験したことを記させていただこうと思う。

授業環境

私がこの授業を担当するようになった当時は、豊中教育実習棟（旧サイバーメディアセンター）で授業が開講されていた。すでに不確かになってしまっている部分もあるが、OSはTurbo Linux、デスクトップ環境はGNOME、WWWブラウザ・電子メールはNetscape Communicator、表計算・プレゼンテーションソフトウェアはApplix Suiteという、今となつては懐かしくすら思える環境での授業であったように記憶している。当初は、授業の段取りを上手く行ってシステムに負荷を集中させないように配慮しないと、システムが不安定になることも多かったように思う。そのため、こまめに作業状態の保存を行わない学生は、システムトラブルによって一瞬のうちにすべての情報が失われてしまうリスクがあることを、身をもって学習させられたものであった。

その後、新サイバーメディアセンターの竣工に伴って、教室は明るくモダンな環境に移り、また授業で用いる機器やOS・アプリケーションも、一般的なPCで使用されているものと、ほぼ変わらない環境が整備された。そのおかげで現在では、学生が初めて見るOS環境に戸惑うことも無くなり、ネットワークに重い負荷がかかった際に感じるもたつきを除いては、教員が授業の進行に無駄な気を遣う場面

も少なくなっている。このように授業環境は、学生と教員がともに内容に集中できる状態へと近づいており、これはサイバーメディアセンターの先生方のご尽力の賜物と感謝している。今後は、さらに要求が高まると思われる画像や動画を多用した作業を行う際にも、学生にストレスが生じない、先進的な環境が整備されていくことを期待したい。

受講生のスキル

たった10年前のことであるが、その当時はまだ、キーボードやマウスの操作がおぼつかない学生も数多くおり、PCの操作とネットワークの基本を教えるところから、毎年の授業は始まっていた。ところが現在では、ほぼ全てと思われる学生が携帯情報端末を自由自在に操り、また多くの学生が教員を遥かに凌ぐ速度でキーボードを叩いて、インターネットを自由に検索し、欲しい情報を入手するだけのスキルをすでに入学時から身につけている。

このような現状を目にすると、情報活用基礎の授業そのものが陳腐化しているかのように思われる方もあろうが、実際に授業の中で学生と接してみると、そのスキルが情報の収集に偏ったものであることに驚かされることが多い。これはおそらく、インターネットからの情報収集が実生活に密着したものになっている一方で、情報の発信やコンテンツの作成を行った経験に乏しい者が多いことによるものであろう。そう考えると、これは医学部・歯学部の授業担当教員が当初から共有していた理念であると思っ

ているが、単なる操作技術のように時代とともに変化する知識を与えるのではなく、今後も続くであろう医療情報環境の変化に柔軟に対応し、質の高い情報を発信し続けることのできる素養を高めることを目標とした教育が、以前にも増して求められる時代になっているのであろうと思われる。

診療室にて

医科・歯科で利用される CT (Computed Tomography) の画像が、PC の処理によって作られる画像であることを、ご存知の方も多いかも知れない。診療室では、CT によって得られた二次元画像をそのまま利用するのみならず、これを三次元的に再構築したレンダリング画像や、任意断面に再構成した画像を作成し、診断や患者さまへの説明に利用する機会が増えている。この一連の行為には、画像分析や形態計測、さらにはプレゼンテーションの要素も必要とされることから、現代の医療を行うためには、情報活用の基礎的素養の習得が必須になっていると言っても過言ではないだろう。

これ以外にも、診療室には電子化の波が押し寄せている。厚生労働省の省令により、従来は紙媒体を用いて行われていた医科・歯科・薬科の診療報酬請求の、原則オンライン化が義務づけられることとなっている。これは、たとえ良好な医療を提供できる人的・物的資源を備えた診療所・薬局であっても、診療情報を適切に管理してこれを集計し、セキュリティを確保しながら請求を行えるシステムを構築・管理できない場合には、保険診療による診療報酬の請求を行えなくなることであり、そのような施設は廃業の危機に直面することを意味している。さらには、カルテの電子化も推奨されており、その運用には個人情報を守るための高いセキュリティと、電子カルテのガイドラインによって示されている真正性、見読性、保存性の確保が求められる。これらの厳しい条件を満たしつつ、診療効率と患者サービスの向上に役立つ電子カルテ運用を維持していくためには、情報活用に関する基礎的な知識が、少なからず必要になっていくであろう。

情報発信の功罪

患者さまがどこの病院に行けば良いかと迷ったとき、従前であれば口コミや医療施設の紹介雑誌を頼りに、病院を選んでおられた方がほとんどであったことだろう。しかし最近では、インターネットを利用して近隣の病院や専門医を検索し、これぞと思う医療施設のホームページをじっくりと見て、そのう

えで受診先をお決めになる方が増えている。また、自分がどのような病気にかかっているのか、どのような治療法があるのかなどの情報を仔細に調べて、そのうえで病院を受診される患者さまも少なくない。

この点は特に誤解のないようにしておきたいが、患者さまが自身の病気に対して不安に思う気持ちや、その病気に関することを全て知っておきたいと思う気持ちは非常に良く理解できる。また、患者さまの視点に立った細やかな配慮がなされ、病気や治療法を正しく解説したホームページが、患者さまの病気に対する正しい理解を助けるとともに不安を和らげ、治療に対するコンプライアンス（協力性）を高める上でも有用であることを、十分に理解している。

しかしながら診療室では、これらの情報を発端とした問題が、結構な頻度で勃発するのである。インターネット上に溢れる情報はまさに玉石混淆であり、どの情報を信用すべきかは、読者自らが判断しなければならない。しかし運悪く、偏った情報や、半ば意図的に誤認を誘導していると思われる情報に出会い、それを事実と信じてしまった患者さまに、数多く遭遇する。また、人は誰しも、自身の健康に関することとなれば、つい都合の良い解釈をしてしまうものなのであろうが、あちこちのサイトに書かれている情報の良いとこ取りをして都合良く継ぎ合わせ、良好な治療結果が得られるはずとの期待を抱いて、病院を受診される患者さまもおられる。このような患者さまの場合、来院時にはすでに治療に対する期待感が醸成されているため、科学的根拠に基づいた医療 (Evidence-based medicine) によって期待できる治療結果を説明し、正しいご理解をいただくまでには、非常に多くの時間と労力が必要になる。

現在はインターネットやツイッターを利用すれば、情報を簡便に発信することができる時代となっているが、将来的に医師・歯科医師として論文やホームページを作成することになるであろう学生には、早いうちから質の高い情報発信が行えるだけの素養を養っていただきたいと願い、授業を行っている。

最後に

医学部・歯学部の情報活用基礎の授業において、

TA が分担してくださっている仕事は多岐にわたり、かつ重要である。最後にこの場をお借りして、これまでに TA の務めを果たしてくれた方々に、感謝の意を表したい。